部活動のあり方を考える

三本木　温[1)]・高橋　健太[2)]

要　旨

日本において学校部活動は，教育課程外の活動であるが，重要な活動である。部活動には2種類あって1つはスポーツ系，1つは文化系であり，多くの生徒が参加している。現在の部活動には，いくつかの問題がある。それは生徒数の減少，教員が忙しいこと，生徒の部活動に対する意識の変化などである。しかし，今後も部活動は，生徒の体力向上，我が国の国際競技力の向上そして文化芸術振興に貢献することが期待される。そのためには，法令を遵守すること，部活動への参加目的の多様性を認めること，そして部活動の運営を学校全体で行うことが重要となるであろう。

キーワード：部活動，体力向上，競技力向上，文化芸術振興

I.　本稿の目的

主として中学校，高等学校における部活動について，学校教育課程における位置づけ，現状と問題点を整理して，今後の部活動の望ましいあり方について考察することを目的とする。

II.　部活動の位置付け

中学校および高等学校などにおける部活動は，学習指導要領に定める教科（必修および選択科目），道徳及び特別活動からなる教育課程の他に行う活動と位置づけられ，教育課程外の活動であるために，その活動内容などについて指導要領等において規定がない。「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議」の報告書[1)]においては，「部活動は，学校教育活動の一環として，学級や学年を離れて子どもたちが自発的・自主的に活動を組織し展開することを支援するもの」とされている。東京都部活動基本問題検討委員会報告書[2)]においては，「部活動とは，学校が教育活動の一環として設定し，指導体制を整備し，校長が認めた指導者（顧問）のもと，主に授業後や休日等に行われる任意の課外活動である」とされている。なお，教育課程内の活動としての特別活動の中に週1時間の『クラブ活動』が定められていた時期があり（昭和43年～平成10年），任意の活動である『部活動』と全員履修の『必修クラブ』といった用語により両者の使い分けがなされていた。しかし，平成10年の学習指導要領改訂によって中学校，高等学校においては特別活動の内容からクラブ活動が削除され，課外活動としての部活動のみが存続することとなった。

部活動は，各種スポーツ活動を行う運動系と，演劇，吹奏楽，合唱といった文化的活動を行う文化系とに大きく分類される。また，部活動の統括団体も，運動系の全国高等学校体育連盟と文化系の全国高等学校文化連盟とに分かれており，中学校においてもほぼ同じ状況にある。平

1) 八戸大学人間健康学部
2) 八戸大学研究生

成18年度の青森県内の全日制高等学校において，運動部活動に所属する生徒は全体の42.9%[3]，文化部活動に所属する生徒は27.3%となっている[4]。教育課程外とはいえ，多くの生徒が関与している活動の一つである。部活動は，存在の根拠はあいまいであるものの，教育活動の一環であり，その存在については誰もが認めている[2]。部活動に所属する生徒にとっては，教育課程内の授業などにも匹敵する重要な活動になっている[注1−3]。

III.　部活動の現状と問題点

部活動は，学校教育において重要な活動のひとつではあるものの，近年，学校現場および部活動をめぐる環境は著しく変化していることから，従来どおりに部活動を行うことが困難な状況になりつつある。以下に一部の例について紹介する。

(1)　生徒数の減少

わが国の人口は全体として減少傾向にあるとともに，その人口構成も若年者層が顕著に減少している。15歳未満人口は，昭和60年には2,603万人（総人口の21.3%）であったのが平成17年には1,740万人（総人口の13.6%）になっている[5]。これに伴い，小，中，高等学校においては生徒数が減少している。例えば青森県では，中学校3年生人口が昭和62年には25,805人だったのが平成15年には16,153人となり，平成24年には13,630人まで減少すると予想されている[6]。運動部活動を統括する団体である全国高等学校体育連盟に加盟している学校数は，平成8年の50,116校から平成17年度には46,976校へ減少し，加盟している部員の数も平成8年の146万人から122万人へと減少した[7]。平成5年から平成15年の10年間で，全国で中学校の卓球部は男女合わせて1,569校，陸上競技部は男女合わせて2,431校減少している。同様に，高等学校の陸上競技部は男女合わせて430校，男子卓球部が142校，女子剣道部が239校減少している[8]。これらのことは，少子化・生徒減少傾向がますます進む中で，学校単位で構成される部活動においては部員数の減少に伴い部活動の維持が困難になり，部活動を通じてさまざまな競技種目を経験する機会が失われつつあることを示唆するものである。

(2)　教員の多忙化

中学校，高校の部活動顧問の悩みについて調査した結果によると，「公務が忙しくて思うように指導できない」「自分の専門的指導力の不足」「施設・設備の不足」「自分の研究や自由な時間等の妨げになっている」「部員数の不足」といった項目を回答する割合が多いことが報告されている[9]。学校教員には，学習指導，生活指導および校務分掌によるさまざまな業務などがあり，その合間を縫っての部活動の指導となる。それにもかかわらず，1週間に5日以上指導に当たる教員は，中学校で61.3%，高校で54.1%にのぼる。授業のない日曜日に，3時間以上部活動の指導に当たる教員は中学校で47.0%，高校で43.3%となっている[9]。この結果から，教員の多くは私生活のための時間を減らして部活動の指導にあたっていると推測される。また，中学校，高校ともに教員の平均年齢は上がり続けており[10]，その結果として，負担の大きい部活動の指導が若手教員に集中している可能性もある。2005年7月2日付の読売新聞には，【若いから】と言う理由で勤務先の中学校で野球部の副顧問を任せられた教員の事例が紹介されている。平日はもちろんのこと土日も練習試合などのために拘束され，遠征のガソリン代は自己負担で，試合に負けると保護者からその指導内容に関して苦情が来るという。2006年9月23日付の読売新聞においては，部活動顧問の重い負担の実態に関して読者から多くの反響が寄せられたことが報じられている。このほかにも，自分が専門的に行った経験のない種目の指導を行わなければならない場合のあること，部活の顧問を行うことによる人事上の評価がほとんどないことなども顧問の教員を悩ませている要因であるとさ

れる[11]。さらに近年では，「モンスターペアレント」という用語が登場しているように[注4]，保護者からの学校への苦情や理不尽な要求が増加していると言われており，これに対応するなどして教員の負担感が増していることが推測される。このような現状では部活動にまで手が回らない，部活動に関わったとしても，それに伴う負担が大きく，効果的な指導を行うことができない状況が予想される。

(3) 部活動に対する教員と生徒の意識格差

横田[12]は，部活動の顧問が挙げる部活動の利点について調査した結果，心身の鍛錬，社会性集団行動の訓練，生徒指導・しつけ，学校生活の充実，生徒とのコミュニケーション，体力・技術の向上，学校の活性化が多く挙げられていたことを報告した。同様に海老原[13]は，学校運動部活動の顧問に対して生徒に期待する部活動への参加動機を調査したところ，チームの和といった帰属感，スポーツの魅力を知る，体力・技術の向上といった要因が多く挙げられていた。同様にスポーツ少年団の団員に対して調査したところ，その参加動機は楽しむため，勝つため，体力や健康のため，といった要因が多く，両者の間は必ずしも一致していないことを指摘している。また横田[14]は，高校運動部員を対象にして，その参加動機を縦断的に調査した結果から，中途退部に至る要因として，部員の側に部活動に参加する動機やニーズが多様であるにもかかわらず，実際にはその一部にしか対応できていない現状があることを示唆している。さらに松尾[15]は，運動部活動と民間スポーツクラブに所属している高校生を対象にして，部活動と民間スポーツクラブに対するイメージを調査した結果，部活動に対してはトラディショナル，かたい，集団的，形式的，古くさい，ヘビー(重い)，上下関係が強い，高圧的，スポーツクラブに対してはモダン，やわらかい，個人的，合理的，新鮮，ライト(軽い)，上下関係(弱い)，民主的，ファッショナブル，ハイクラス，プロフェッショナル，格好良い，というイメージが抽出されたことを報告した。これらのことから，学校や顧問が思い描く部活動のあるべき姿と，部員となる生徒が部活動に求めるものとの間には，少なからぬギャップがあり，このことが部活動からの脱落や活動の停滞を招く可能性のあることが示唆される。

IV. 部活動の意義について

これまで述べてきたように，部活動を取り巻く環境は厳しさを増してきている。それにもかかわらず，生徒が部活動に参加することには，意義のあることと一般に認められている。児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議報告書[1]では，「部活動は，(中略)児童生徒の体と心の発達や仲間づくり，教科を離れての生き生きとした活動や教師との密接な触れ合いなどができる場であって，その教育的意義は大きい」とされ，東京都部活動基本問題検討委員会報告書[2]においては，「部活動は，自己の確立，思いやり，自主性や社会性などを育て，豊かな人間形成や生涯学習の基礎づくり，また，個性・能力の伸長や体力の向上・健康の増進などに対して効果的な活動」とされている。また中澤[16]が報告している部活動顧問のインタビューにおいては，普段の授業では見られない生徒の姿や成長を目にする機会であること，生徒との時間的空間的な共有が図られて教師－生徒関係が構築されることなどが，部活動の意義として挙げられており，部活動に直接携わる学校教員自身もその意義を認めながら活動していると思われる。

V. これからの部活動に期待されること

(1) 体力の向上

近年では，児童生徒の体力低下が深刻な社会問題として取り上げられるようになっており，2007年に改定された文部科学省のスポーツ振興基本計画[17]においては，「こどもの体力向上」

が重要な目標として位置づけられた。このために体育の授業だけではなく，部活動を活性化させる必要性が指摘されている。具体的には複数の学校が合同で活動する部活動や複数の運動種目を行う総合運動部活動などが提唱されている。

(2)　国際競技力の向上

2000年以降に，わが国の国際競技力の向上を目標として掲げた文部科学省のスポーツ振興基本計画[17]と日本オリンピック委員会の国際競技力向上戦略[18]が相次いで発表された。これらにおいては，優れた素質を持った選手を一貫して指導するためのシステム構築が提唱されているが，この実現のためには，従来からの学校部活動を基盤として関係機関が連携していくことが不可欠である。また，指導者に対しては，合理的なトレーニング実施のためのスポーツ医・科学的知識や性急に結果を求め過ぎない一環指導システムへの理解が求められる。

(3)　文化振興

わが国の文化芸術の振興に関しては，2001年に定められた文化芸術振興基本法と2007年に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第2次方針）」[注5]によって基本的な方向性が示されており，その中で「地域文化の振興」と「子どもの文化芸術活動の充実」とが重点項目として挙げられている。具体的には，文化部活動への外部指導者の派遣や地域の人達と一緒に活動する部活動などが行われており，地域の文化芸術活動の拠点として部活動が機能することが期待されている。

VI.　これからの部活動のあり方

学校部活動は，教育課程における位置づけがあいまいであるにもかかわらず，その教育的効果は高く社会的な期待は大きい。しかし，少子化・生徒数減少，学校教員の多忙化，高齢化あるいは学校に対するクレームの増加，あるいは部活動に対する指導者と生徒の意識の乖離などによって，部活動の維持が困難となっている現状があり，これらに対する行政や学校の対応は始まったばかりである[2]。

上述した問題点を解決することができ，かつ，より効果的な部活動のあるべき姿を提示することは現時点では困難であるが，共通項としての部活動の基本的あり方については，以下の条件が挙げられよう。① 地域と連携しながら，勝利至上主義のみに捉われない，多様な目的を持った生徒の受け皿となるような体制とすること。② 部活動の運営にあたっては，法令順守，意思決定の透明性確保に特に注意し，それらの情報については関係者に対して積極的に開示すること。③ 部活動の運営は，顧問に任せきりにするのではなく，地域住民などによる外部講師などを活用するなど，学校を中核としたグループを形成して学校全体で進める体制を構築すること。

付　　記

本稿の一部は，第46回東北地区私学教育研修会（平成19年7月25日，八戸市）で発表したものである。

謝　　辞

資料をご提供いただいた，青森県教育庁スポーツ健康課学校体育グループ（八島隆明指導主事），青森県高等学校体育連盟研究部（木村浩哉先生，苅谷和幸先生），青森県高等学校文化連盟事務局（福浦俊光先生），NPO法人SCC理事長・太田敬介様に，記して謝意を表します。

注

注1)　尾崎商事（カンコー学生服）による高校3年生を対象とした調査において，学校で思い出に残る行事について，修学旅行（57.9%），文化祭（48.9%）に次いで部活

動（46.4%）が挙げられている（2006年3月実施：http://ozaki.jp/homeroom/vol_04.html）。

注2）近年では「部活動」を題材とした小説が大きな反響を呼んでいる。例えば高校陸上部を舞台とした佐藤多佳子著「一瞬の風になれ」は2007年の「全国書店員が選んだ一番売りたい本」に選ばれた。

注3）大手の新聞社では，学校教育と部活動とを題材にした連載記事を掲載している。例えば，朝日新聞「スポーツフロンティア；高校生スポーツ考」(2007.7.9～2007.7.18）や読売新聞「教育ルネサンス；部活激変」(2006.9.12～2006.9.23)などを参照。

注4）例えば日経新聞（2007.6.25）「『クレーム親』猛威」を参照。

注5）平成19年2月9日閣議決定「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第2次基本方針）」による。

参考文献

1）文部省，児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力会議報告書．1996.

2）東京都教育委員会，東京都部活動基本問題検討委員会報告書．2005.

3）平成18年度青森県高等学校体育連盟研究大会資料集．2006.

4）青森県高等学校文化連盟資料（未公表）．2007.

5）総務省，平成17年度国勢調査集計結果（http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/01.htm）．2006.

6）青森県教育委員会，21世紀の青森県を担う人づくり．2004.

7）全国高等学校体育連盟資料（http://www.zen-koutairen.com/f_regist.html）．2007.

8）文部科学省，平成16年度文部科学白書（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200401/hpab200401_2_027.html）．2005.

9）文部省，運動部活動の在り方に関する調査研究報告書．1997.

10）文部科学省，平成16年度学校教員統計調査．2005.

11）横田匡俊，顧問教員からみた学校運動部活動の問題点（学校運動部活動の現在と未来）．トレーニングジャーナル，2004年4月号，62-65, 2004.

12）横田匡俊，顧問教員からみる運動部の利点と今後（学校運動部活動の現在と未来）．トレーニングジャーナル，2004年5月号，64-67, 2004.

13）海老原修，子供の事情と指導者の期待（学校運動部活動の現在と未来）．トレーニングジャーナル，2004年8月号，55-59, 2004.

14）横田匡俊，運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動．体育学研究，47(5), 427-438, 2002.

15）松尾哲矢，スポーツ競技者の《場》とハビトゥス形成：学校運動部と民間スポーツクラブに着目して．体育学研究，46(6), 569-586, 2001.

16）中澤篤史，生徒理解・生徒指導の観点から見た運動部活動と学校教育の結び付き（学校運動部活動の現在と未来）．トレーニングジャーナル，2005年4月号，46-50, 2004.

17）文部科学省，スポーツ振興基本計画．2006.

18）日本オリンピック委員会，国際競技力向上戦略（新装版）．2002.

Consideration concerning what should be of the extracurricular activity

Yutaka SAMBONGI and Kenta TAKAHASHI

In Japan, “Bukatsudou” (the extracurricular activity) is an activity outside the curriculum in the school. However, it is admitted that the extracurricular activities is an important. There are two kinds of extracurricular activities. One is a sports activities, one is a cultural activities, and a lot of students are participating. Extracurricular activities have some following problems now. ; decreasing of student, making to busy of teacher, and change in consideration to student’s the extracurricular activities. Nevertheless, in the future, the extracurricular activities will be expected to improve the student physical fitness, and to contribute to the promotion of the improvement of international sports performance, and the cultural art of Japan. It is likely to become important the following for that ; the observance of the law, admitting a variety of participation purposes, and managing extracurricular activities at the school entirely.

Keywords : extracurricular activity, improvement of physical fitness, improvement of sports performance, promotion of cultural art